

## 追われている僕たち

何慕  
HE MU

登校日だが、日差しを浴びないまま一日中家にこもって作業する。太陽が沈んでから家を出て、ちょっと散歩がてらに買い物に行くのが日常になった。このような光景は2、3年前の僕にはきつと想像できないだろう。そう思いながら、僕はコンビニでお金を引き出した。

「ピー」

どうした？ 耳障りな音と共に、僕は嫌な予感がした。

### II

スペア携帯を充電し、銀行からの「あなたは外国で引き出せる現金の上限を超えたため、口座が凍結されました」という知らせを見つけた。急いでネットで調べたところ、現金の引き出しが年間10万中国元（日本円で177万円）を超えたら、口座が凍結されると初めて知った。

あまりにもシュールすぎて笑いそうだ。そもそも、学費を含めて年間177万しか使えないなんて理不尽じゃないか。焦り、不安、怒り…。僕の胸の中にまるで風船があるように、暗い闇の中に膨らんでいった。

「すぐ解決しないと生活に支障が出る…。論文の締め切りも近いし、今日中になんとかしないと…。」頭がうまく回らない。思考に勝った苛立ちが治まらない。

でもこんな夜中に文句を言う場所すらない。

### III

僕はわかっている。人にものを頼むときは頭を下げないといけない。

僕はわかっている。人から冷たい態度を受けても当然だ。相手にしたら、ただの他人事だから。

### IV

常に、僕は成人したにも関わらず、まだ自立できていない自分を恥ずかしいと思っている。特に、こんな夜中に国の銀行に電話を掛けられなくて、父に頼るしかない自分を。

「私はまだ外地に出張している。銀行の知り合いに聞いてみる。待ってくれ。」父の声から溜まっている疲れが伝わってきた。

一時間後、父からのチャットのスクショに僕の心は痛んだ。

父の口座凍結解除方法の問い合わせに対して、その“知り合い”は、「何にもわからないのか」「そんな事前に回避すべきだろう」などと、ただ僕のことを責めるだけで、質問に何一つ答えてくれなかった。最後に一言、「別の送金方法を使え」で会話が終了していた。

まるで父が「君の子供は大馬鹿だ！」と罵られたように感じて、僕は言い返す気すらなくなった。自分が馬鹿にされたことより、父を恥ずかしい目に遭わせたのが一番悲しかった。

### V

結局、何とかなかった。

たいしたことでもなかった。こんな経験、生きている限り誰でも一つや二つあるだろう。僕も初めてではない。

しかし、やはり、自分が情けないとしか言いようがない。

## Ⅵ

後日、父と将来のことについて話し合った。「今の研究が自分に合っているかどうか分からないから、将来の職業はまだ決められない」という僕の考えに、父は「好きかどうか、合うかどうか、そんなのはどうでもいい。人は生活のために一番いい道を選ぶしかないんだ」と、淡々と返した。

その瞬間、僕は再びあの夜のように、無数の同じ夜のように、深い、深い海の底に沈んで行くような感覚を覚えた。